

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (教育学)	氏名	石井 佳葉
論文題目	ロールシャッハ法のイメージカード選択に関する心理臨床学的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は、心理臨床実践現場で多用されている投射法の心理検査であるロールシャッハ法を素材として、その施行上、補助的に使われてきた基礎的な実施を終えた後に尋ねる好き嫌いカード、両親や自己イメージカードの選択段階に臨床的な意味を見出そうとする実践研究である。さらにその「イメージカード選択」において被検者がどのように心を動かし、どのように反応を産出しているのかを明らかにすることで、この手続きの有用性を示そうとしたものである。</p> <p>ロールシャッハ法において、数量的な分析と被検者の反応語や検査態度に着目する質的分析の両方が求められ、それらに有効的な意味をもたらす「継起分析」が活用されている。しかしながら、継起分析に関して、自由反応段階・質問段階の後に導入されるイメージカード選択までを含めて、十分に検討されてきたとはいえない。序章では、これらの現状から、本論文でイメージカード選択をとり上げることの必然性について論じている。次に第1章において、本法を通じた対人関係理解に焦点を当て、本論文における解釈の枠組みを示している。つまり対人状況としてのロールシャッハ法の特徴をあげ、検査者－被検者の関係性を含んだ心理アセスメントが重視されていることを指摘した。続く第2章では、イメージカード選択が実施されるようになった歴史的背景を整理し、関連する研究報告が少ないことの要因について論じた。米国において、当初Ⅳカードに父親、Ⅶカードに母親の各イメージとの関連が指摘されて以降、その立証としてイメージカード選択が実施されるようになったが、その後この仮説にはほとんど関心が寄せられなくなっていった。一方本邦の臨床実践においては、被検者の選択したカードの語りを深めることで心理療法的に扱うアプローチ、あるいは、選択されたカード同士の関係性や情緒的な側面の検討から、被検者の対象イメージを捉えるアプローチなどといった独自の臨床的なイメージカード選択の立場が生まれていった。つまりイメージカード選択について、被検者の内面世界を理解するための臨床的な手法としての価値が見出されてきたのである。この点を強調するため本論文では「イメージカード選択段階」と命名し、検討を進めていくこととした。</p> <p>この実態を把握するため、第3章では2つの調査結果を提示した。第1調査として、臨床心理士を対象にイメージカード選択段階の「実施状況」、「学修機会」等に関する質問紙法を実施した。結果、対象者の90%以上がイメージカード選択段階を認知しているにもかかわらず、検査者間で統一した見解が存在していないことが明らかとなった。第2調査では、34名の調査事例をもとに、イメージカードの決定に要する時間と、選択理由のコーディングについて統計的な分析を行った。被検者から得られたイメージカード選択段階の結果について、被検者の内面がそのまま反映されているものと見なして扱われてきたが、ロールシャッハ法実施中にも、被検者の心はさまざまに揺れ動いていると考えられており、イメージカード選択段階まで含めてそうした流れがあるものと理解できる。そこで第4章では、イメージカード選択段階における被検者の心的力動を検討するため、セルフ・イメージカードに着目し、加えて日常生活における被検者の対人状況の体験を把握する質問を加えることで、それぞれの群によるロールシャッハ指標を比較した。本研究により、検査者との二者状況の中で、検査者に心的に接近することをめぐる葛藤や不安も被検者の反応に影響を及ぼしている可能性が示唆された。</p>			

これを受けて第5章では、イメージカード選択段階を細分化し、その反応過程に沿って、被検者の内面世界で生じている心的力動を明らかにしていったのである。これらのプロセスへの着目から、異なる被検者間で似たような反応内容の同じカードが選択されたとしても、その背景に潜む被検者の自我の働きや情緒体験を含めて固有の特性について理解することが可能となる。第6章では、これまでの検討を実践的に応用するため、臨床群として発症初期の摂食障害女性の事例をもとに詳細な検討を行っている。全体の総括を目指す第7章では、これまでの章における論考や調査研究、そして他のアセスメントツールとの比較検討を踏まえ、心理アセスメントにおけるイメージカード選択段階の方向性を提示した。自由反応段階から質問段階、イメージカードの決定とその理由説明にはいずれも「退行的な状態での反応」から「論理的に言語化する」という流れがあると理解されたのである。こうした特徴を踏まえ、教示内容、イメージカードの実施手順、検査者－被検者の相互作用をとり上げ、イメージカード選択段階の実施の在り方について検討を行った。

終章では、イメージカード選択段階を被検者理解に役立てるためには、「検査者の裁量で導入できること」の意義と、使いこなしの難しさを理解しておかなければならないこと、検査者は、被検者の特性に合わせた形でイメージカード選択段階を導入していく一連の作業自体が多角的多面的な心理アセスメントであると主張し、被検者の特性に寄り添った形で検査を終える所作にもふれ、本論文は締めくくられている。

(論文審査の結果の要旨)

ロールシャッハ法は、世界中で心理アセスメントツールとして活用されている臨床的有用性の高い検査である。その創成の歴史はちょうど 100 年前に遡り、以来さまざまな学派、特色ある技法の発展を遂げながら現在でも多くの実践研究が積み重ねられてきている。そしてその施行法においては、教示等の微細な相違点はあるものの、「何に見えるか、どのように見えるのか」を列挙させる「自由反応段階」、そして各反応について説明を求める「質問段階」という 2 つの主軸となる段階により構成されている点において世界共通である。その共通基盤のもとに、ロールシャッハ法を用いた多くの基礎研究、臨床事例研究が発表されてきているが、その主題は、時代や世代における特筆すべき精神疾患、発達障害の様相等を含むさまざまなこころの問題、健常者における生活感情や自己に対する感情との関連性を検討するものが多く産出されている。つまり、心理臨床現場にも受け入れられる様式で、施行法に関する独創的な意義を見出そうとする研究の継続的遂行は、極めて困難といえる検査技法でもある。

本論文は、そうした課題に果敢に取り組み、心理臨床的有用性を明快に示しながら新たな手法を提示していく、独創的な研究の集大成といえるものと評価される。ロールシャッハ法は、上記に述べた主軸となる「自由反応段階」、「質問段階」に加えて、限界検査法 (Testing-the-limits)、イメージカード、検査の印象という流れで実施される。本稿では、その施行上、補助的に使われてきた基礎的な実施を終えた後に尋ねる好き嫌いカード、両親や自己イメージカードの選択段階に臨床的な意味を見出そうとするものである。こうした実施法の中のある段階について、さらなる臨床的意義を追究しようとする独創的な視点に、まず本論文の価値が見出される。加えて、上述の様な先行研究が多い中、このような施行法に関する国内外の文献を詳細かつ丁寧にサーベイし、歴史的な展開を十分咀嚼した上でこの段階を独立した第 3 の段階、「イメージカード選択段階」として取り上げるところに、第 2 の特筆すべき点と評価できる。つまり、単なるイメージや感想に留めるものではなく、厳しい心的課題からいくらか解放されたところで、被検者がどのように心を動かし、反応を産出しているのかを多角的に明らかにすることで、より深い対人関係の特質を理解できると主張する。本法の使いこなしに継続的で高度な訓練が求められるのは、周知のことでもあり、本論文の完成までに継続されてきた実践研究に対して、論文調査委員からは、一様に高評価を得た。

また、本論文を構成する複数研究の対象も多岐にわたる。まずイメージカード選択段階がどのように活用されているか、臨床心理士を対象とした実施状況、学修機会の調査を行った。次いで、一般青年を対象としてイメージカード決定に要する時間、選択理由のコーディングについての統計的な分析を進め、父親イメージカード、母親イメージカード、セルフ・イメージカードにおける客観的特徴を捉え、まとめている。さらに、その選択段階におけるより深い被検者の心的力動に迫るために、日常生活における対人状況での体験を把握する質問紙と共に、ロールシャッハ法における、本段階でのセルフ・イメージカード選択と最も好きなカードとの関連性により、詳細な検討を進めている。調査事例を素材としながらも、イメージカード決定プロセスの精査と、その理由等の表明、当該カードに現れた反応への感情の付与などを極めて繊細に分析している。そして臨床的に展開して分析をすすめるために、外的な刺激に揺さぶられやすく、検査状況の変化に対して敏感に反応しやすいという知見がある摂食障害事例を元に、自由反応段階からイメージカード選択段階に至るまでの心的力動、検査者との対人関係の展開を丁寧に検討していくことで、一連の研究のまとめとしている。このような多角的な視点を持った研究の拡充を行っているところにも、本研究

の高い価値を見出すことができる。

一連の研究成果から、自由反応段階から質問段階、イメージカード選択段階における決定とその理由説明には、「退行的な状態での反応」から「論理的に言語化する」流れがあると理解された。これらの知見と、検査者－被検者の相互作用の詳細な検討から、対人関係特性に対するより深い理解がもたらされると、結論づけたのである。

試問では、本論文が基礎研究という視点を重視しながらも、長年にわたる丁寧な研究の積み重ねであり、多角的な分析と、奥深い考察がなされていることについて、いずれの調査委員からも高い評価を得た。その上で臨床事例にかかわる詳細な分析として、このイメージ選択段階に自由にふるまえるかどうか、発達的な水準や精神病理水準での精査が求められること、それらの積み重ねによって、この第3の段階が、ロールシャッハ法における臨床的有用性をいかにして高められていくかについて、さまざまな議論がなされた。心理療法の導入期に、あるいは心理療法の効果としても活用できる心理アセスメントツールとして、本論文での知見の汎用性をめざすステップについて、極めてレベルの高い意義深い討論となった。それゆえ、これらの議論は、本論文の価値を損なうものではなく、むしろ、心理臨床実践におけるロールシャッハ法の活用についての幅広い視点や、今後の著者のさらなる臨床実践活動、指導者としての活動に重要な視点をもたらすものであった。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年7月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降